発見されたのです。

感染症は「発見、即治療」が大原則です。初期治療が何より重要であることは、先ほども言ったとおり、誰でも知っていることです。インフルエンザでも、病院で感染がわかると、すぐにタミフルをはじめ、いろんな薬を処方してくれて、「この薬を飲んで二、三日は、栄養を摂って寝てください」と言われて会社や学校を休み、それでほとんどが治りますよね。しかし、二類相当以上の扱いにされた新型コロナは、逆に感染がわかった段階で保健所の管轄に入り、入院調整その他、すべてが保健所の扱いにされて、そのために入院もできず、〝放置〟され、運の悪い人は死んでいくわけです。

完全な失政です。保健所は医療機関ではないため、薬の処方もしてもらえないわけですからね。最初から感染者が増えたら、とても対応できないことが予想されていても、官僚も政治家も、これを進め、そして直そうともしないのです。

私は、自宅隔離中に亡くなる人が急増した二〇二一年の一月から、繰り返しこの問題を指摘してきました。しかし、国や東京都が動くことはありませんでした。相変わらず二類相当の扱いを続け、「自己免疫力でコロナと戦いなさい」との方針を続けたわけです。

インフルエンザと同じように初期治療をするには、コロナを二類相当から五類に下げれば

いいだけのことです。その上で新型コロナの治療は「公費負担とする」ということを決めるだけでいい。しかし、こんな簡単なことが日本ではできないわけです。政府のやっていることは「人流抑制」のために緊急事態宣言を繰り返すことだけでしたね。これが日本であり、日本の指導層であることを、国民には、是非、知ってほしいですね。

転機となった医師の登場

門田　二〇二一年八月から九月にかけて、東京では、尼崎の開業医で新型コロナや在宅医療のエキスパートである**長尾和宏**医師のおかげで、やっと初期治療が行われるようになりました。長尾医師は、BSフジの『プライムニュース』という討論番組に八月二日と十日の二回、生出演して〝保健所縛り〟のために、自宅療養という名の「放置」で死なくていい患者が亡くなっていることを、それぞれ二時間にわたって話しました。

そこで医師による早期診断と早期治療の重要性、そしてイベルメクチンを国民に〝スガノメクチン〟として配れ、そうすればコロナ禍は終わる、と主張したのです。実際に長尾医師は、千人単位のコロナ患者を診て、一人も死なせていませんから、現場からの説得力

が抜群でした。抗体カクテル薬を在宅でも使えるように、また、軽症者の自宅療養は在宅医が担う、あるいは、五輪後は二類から五類にせよ、といった数々の提案をしたわけです。

特に八月十日の放映分では、東京都の尾崎治夫医師会長と直接の討論となり、初期治療の重要性を淡々と訴えました。ことごとく論破した感じでしたね。三日後の八月十三日、尾崎都医師会長が全面的に都の医師会が初期治療に乗り出すことを宣言しました。「あっ、これで事態が改善される」と思いましたよ。

初期治療さえすれば、コロナは、普通のインフルエンザよりやや軽いくらいなものだそうです。オミクロン株も、感染力は強いですが、重症化はほとんどしないし、死者も出にくい。初期治療もせずに、「自己免疫力だけで戦いなさい」といわれたら、さすがに重篤化する人が出てくるかもしれませんが、初期に治療さえすれば大丈夫です。

東京は、やっと開業医が初期治療に乗り出したことで、安心感が広がりましたね。二〇二一年十月、十一月で、一日の陽性者が一〇人を切るなど、世界が驚くような状況になりました。ワクチン効果と初期治療の効果が相まって、陽性者と重症者が激減したわけです。本当に、なぜやらなかったんだ、という感じですよね。でも、これが日本、これが日本の指導者、エリートたちということですよ。

毅然と生きる日本人

華岡青洲

一七六〇年（宝暦十年）、紀伊国（和歌山県）生まれ。一八三五年（天保六年）没。江戸後期の外科医。世界に先駆けて麻酔剤を開発し、記録上史上初の全身麻酔による乳癌手術を行うなどの積極的な治療にあたった。手術用具の開発にもあたり、華岡流外科具として普及。中国系薬方にも詳しく、華岡が開発した薬剤は今も使用されている。

今村均

一八八六年（明治十九年）、宮城県生まれ。一九六八年（昭和四十三年）没。陸軍大学校二七期首席。最終階級は陸軍大将。一九四二年、オランダ領東インド（インドネシア）を攻略する蘭印作戦を指揮。インドネシア各所への学校などの施設の建設、インドネシア独立歌禁止の解除、旧支配者であるオランダの民間人の居住の自由、捕虜のオランダ軍人間での自由な交流を認めるなど、他国とは一線を画す寛容な軍政を展開したことで知られる。

柴五郎

一八五九年（安政六年）、会津（福島県）生まれ。一九四五年（昭和二十年）没。一八七九年（明治十二年）に陸軍士官学校を卒業後、日清戦争中は大本営参謀、戦後に清国公使館付武官となり、義和団事件では北京の外国公使館一帯を部下を率いて守り抜き、事態収拾に奔走、事件解決に導いた。一九一九年に陸軍大将となり、台湾軍司令官となった。一九二三年に退役。

吉田昌郎

一九五五年（昭和三十年）、大阪府生まれ。二〇一三年（平成二十五年）、没。技術者、元福島第一原子力発電所所長。東京工業大学工学部を卒業し、大学院で原子核工学を専攻。東京電力株式会社に入社し、二〇〇七年、原子力設備管理部部長となる。二〇一〇年六月より執行役員および福島第一原子力発電所所長。二〇一一年三月十一日に発生した福島第一原子力発電所事故の際、現場の最高責任者として冷静かつ果敢に対応に当たった。

京谷好泰

一九二六年（大正十五年）、広島県生まれ。「リニアの父」と呼ばれる鉄道技術者でリニアモーターカーの開発者。元日本国有鉄道浮上式鉄道技術開発推進本部長。東海道新幹線が開業した一九六四年に次世代交通の開発を命ぜられ、一九六六年、五人の国鉄技術者によって「超高速鉄道研究同好会」が発足し、京谷は当時最年少のメンバーとして参加。世界に先駆けて、日本独自の「超伝導方式による次世代超高速鉄道」の開発を推進した。

長尾和宏

一九八四年（昭和五十九年）に東京医科大学を卒業後、大阪大学第二内科に入局。聖徒病院、大阪大学病院第二内科、市立芦屋病院内科勤務を経て、一九九五年、兵庫県尼崎市に、複数医師による年中無休の外来・在宅ミックス型診療所である長尾クリニックを開業。新型コロナウイルス感染症に対しては現場医師として在宅医療に奮闘するとともに、政府の対策に対して自身のサイトやSNS、テレビ出演を活用して積極的に意見・提案を発信している。著書に『ひとりも、死なせへん～コロナ禍と闘う尼崎の町医者、551日の壮絶日記』（ブックマン社、二〇二一年）などがある。

心を奮い立たせる日本の偉人

世界を震撼させた日本人

門田隆将

高山正之

日本を貶める
マスメディア、
腐敗した官僚たち

だが、この国には こんな男たちがいた

・死ぬかもしれない事故現場に残る覚悟
・在留邦人の危機を救ったトルコとの友情
・日英同盟のきっかけとなった死を恐れない侍たち

SB新書